

# 任意の解釈をもつ空範疇の生起について\*

王 丹丹

## 要 旨

本稿は、日本語における任意のモノを表す代名詞「物」とゼロ要素の交替について考察する。(i) に示すように、任意のモノを表す「物」は、目的語位置においては顕在的に出現することが要求され、脱落しにくい。

- (i) a. 年寄りになると、物を落とすことが多くなる。
- b. \*年寄りになると、e<sub>arb</sub>落とすことが多くなる。

本稿は、王 (2008) に従い、「物」が目的語位置において脱落しにくいという事実は空目的語の性質及びトピックになる要素の性質に起因していると主張する。本稿の議論は、任意の人を表す要素は目的語位置において脱落しにくいという王 (2008) の議論と共に、任意の解釈をもつ空範疇は目的語位置に生起しないという先行研究 (Kuroda1983 等) の主張を支える証拠になる。

## キーワード

任意のモノ 物 目的語位置 空範疇 顕在的 交替

## 1 はじめに

生成文法では、(1) に示すように、音形をもたないが一定の意味解釈を有し、一定の文法的な役割を果たす空範疇が存在すると仮定されている。

- (1) a. John<sub>i</sub> tried [PRO<sub>i</sub> to go to Tokyo].
- b. John<sub>i</sub> persuaded Mary<sub>j</sub> [PRO\*<sub>ij</sub> to go to Tokyo].
- c. [PRO<sub>arb</sub> Smoking] is harmful.

空範疇の意味解釈から言えば、(1a, b) では、補文における空主語はそれぞれ主文の主語 John、主文の目的語 Mary と同一指標をもち、その意味解釈は特定の。それに対して、(1c) は、誰がタバコを吸っても有害だと述べており、文主語における空主語は特定の

---

\* 本稿は、第 32 回筑波日本語日本文学会 (2008 年 9 月 20 日、於: 筑波大学) での発表内容をもとに加筆、修正したものである。席上、有益なご指摘を下された方々に感謝申し上げます。

人をさすのではなく、人間一般を意味している (高見・久野 2006)。先行研究では、(1c) にあるような空範疇が有する意味解釈は任意の解釈と呼ばれている。

また、任意の解釈をもつ要素はゼロ形式の要素だけでなく、顕在的なものも存在する。Chomsky (1986: 117) は、任意の解釈をもつPRO<sub>arb</sub>に対応する顕在的な要素は英語では“one”、ドイツ語では“man”、フランス語では“on”であると指摘している。また、Rizzi (1986) では、イタリア語における“la gente”は任意の解釈をもつpro<sub>arb</sub>に対応する顕在的な要素として用いられている。(2a, b) の (補文の) 主語位置にある“one”、(2c) の目的語位置にある“la gente”は、いずれも任意の解釈を有すると言われる。

- (2) a. One shouldn't do such thing. (Chomsky1986: 117)  
 b. We would scarcely believe [one capable of such action]. (同上)  
 c. Questo conduce (la gente) alla seguente conclusione. (Rizzi1986: 501)  
 'This leads (people) to the following conclusion.'

本稿は、(1c)、(2) における空範疇、顕在的な代名詞が有するような任意の解釈をもつ要素を研究対象とする。また、任意のモノを表す顕在的な要素とゼロ要素の交替現象について考察し、任意のモノを表す要素が目的語位置では脱落しにくいことを示す。さらに、その理由について説明を加える。王 (2008) における考察、つまり、任意の人を表す要素は目的語位置では脱落しにくいということを勘案し、任意の解釈の指示範囲が人を表す場合でも、物を表す場合でも、任意の解釈をもつ空範疇は目的語位置には生起しないという結論を提示する。

本稿の構成は以下のようなものである。2 節では、任意の解釈の指示範囲について先行研究を検討し、本稿の立場を示す。また、本稿の議論の中心となる任意のモノとはどのようなものかについて考える。その上で、任意のモノを表す顕在的な要素は日本語では「物」であることを指摘する。3 節では、任意の解釈をもつ空範疇の生起に関する先行研究を概観し、任意のモノを表す目的語とゼロ要素の交替について考察する。また、任意のモノを表す目的語「物」がゼロ要素と交替しにくいことを、文のレベルと複合語構成のレベルという 2 つのレベルから検証し、その理由について説明を加える。4 節では、本稿が論じる現象は日本語においてだけでなく、中国語においても見られ、通言語的な意味合いをもつ現象であることを指摘する。最後に、5 節では、本稿のまとめと今後の課題について述べる。

## 2 任意の解釈の指示範囲、任意のモノ

ここでは、任意の解釈の指示範囲について先行研究を概観し、本稿の立場を示す。また、本稿の研究対象となる任意のモノとはどのようなものかを、任意の人の意味を参照にして考える。さらに、日本語において任意のモノを表す顕在的な要素は何であるかを見てみる。

## 2.1 任意の解釈の指示範囲と本稿の立場

任意の解釈に関する先行研究は、英語に関しては Chomsky (1981, 1986)、スペイン語に関しては Suñer (1983)、イタリア語に関しては Rizzi (1986)、日本語に関しては Kuroda (1983)、影山 (1993)、高見・久野 (2006) などがある。しかし、任意の解釈の指示範囲に関しては、先行研究ではまだ統一した見方がない。Chomsky (1981) では、任意の解釈は人だけを指示すると明確に指摘され、また、Rizzi (1986) では、任意の解釈は [+human] の素性をもつとされている。それに対して、Kuroda (1983)、影山 (1993) などでは、任意の解釈は任意の人だけでなく、任意のモノをも意味するとされている。

- (3) a. It is possible [PRO<sub>arb</sub> to roll down the hill]. (Chomsky 1981: 324)  
 b. L'ambizione spesso spinge \_\_ a commettere errori. (Rizzi 1986: 503)  
    ‘Ambition often pushes people to make mistakes.’  
 c. \*[子供がPRO<sub>arb</sub>買うことは]禁じられている。 (Kuroda 1983: 154)  
 d. \*[原子炉からPRO<sub>arb</sub>漏れる]ことは、人類の破滅につながる。 (影山 1993: 58)

Chomsky (1981) は、(3a) の不定詞節の空主語について、“roll down the hill” 自体はいずれが主語にきてもいいはずであるし、また PRO が一般に人間に限られるものでもないのであるが、(3a) は、人が坂を転がり落ちることについて述べられていることができるが、岩が転がり落ちることについて述べていることにはまずならないと論じている。つまり、任意の解釈は人だけを指示するとしている。一方、Kuroda (1983)、影山 (1993) は、それぞれ (3c) (3d) をもって任意の解釈をもつ空範疇は目的語位置に出現しえないと論じている。これらの例文では、動詞「買う」の目的語、非対格動詞「漏れる」の主語は何かの物であると思われる。これらの例から、Kuroda や影山が任意の解釈はモノをも指示するとしていることが分かる。

王 (2008) は、Chomsky (1981)、Rizzi (1986) などに従い、任意の解釈は人を指示するという立場で、日本語における任意の人を表す要素に注目し、その現れ方について考察した。本稿は、Kuroda (1983)、影山 (1993) などに従い、任意の解釈が物を指示する場合に注目し、任意の解釈をもつ要素とゼロ要素の交替について考察する。

## 2.2 任意のモノとはどのようなものか

前節で述べたように、Kuroda (1983)、影山 (1993) などは、任意の解釈は任意のモノをも指示するとしている。ところが、任意のモノの定義については明確に論じていない。本稿では、任意の人の概念を参考にしながら、任意のモノとはどのようなものかについて考えてみる。

1 節で見たように、先行研究では、(1c) のような空主語や (2) のような代名詞 “one” “la gente” は特定の人を表さず、不特定の人、人間一般を意味し、任意の解釈をもつと言われ

る。つまり、任意の人は特定の誰かを指さず、人間一般を表すのである。また、次の (4) に示すように、Moltmann (2006) は、任意の解釈を有する場合、英語における代名詞 “one” は、グループやクラス、類別を表す表現とは共起しにくいと指摘している。つまり、任意の解釈は類別やグループなどの意味を示さない。

- (4) a. # One does not know each other well.
- b. # One could become rare.
- c. This kind of animal could become rare.

(Moltmann2006: 260)

(4c) に示すように、類別を意味する主語 “the kind of animal” は述語 “rare” と共起するが、(4b) にある任意の人を表す代名詞の “one” は “rare” と共起しにくい。また、(4a) に示すように、任意の人を表す “one” は、グループやクラスを意味する表現 “each other” と共起しにくい。

以上見てきた任意の人の意味を参考にし、本稿では、任意のモノは特定のモノ、類別やグループ、クラスなどを表さず、物一般を意味すると捉える。また、日本語では、物一般を表すには、「物」という要素が使われると考える<sup>1</sup>。

- (5) a. バスの中に物を忘れていないかチェックしてください。
- b. 年寄りになると、物を落とすことが多くなる。
- c. 子供は物を覚えるのがはやい。

(5a) は、運転手がバスを降りる客に注意する表現であり、その目的語の「物」は特定のモノではなく、任意のモノである。(5b) は、文全体は総称的な時制環境にあり、一般的に成立するという理屈を述べるものである。その目的語の「物」は (5a) と同様に任意のモノを意味する。また、(5a, b) における「物」は特定のモノを指示しないが、客観的に存在するモノを指示すると思われる。一方、(5c) における目的語の「物」は、客観的に存在するモノよりも抽象的なモノを表す点で (5a, b) と異なっているが、それが表す内容は特定のモノでなく、任意的であるという点で (5a, b) と似ている。このように、日本語では、客観的に存在するモノであれ、抽象的なモノであれ、任意のモノであれば「物」という要素が使われる。

---

<sup>1</sup> 本稿は、「物」という要素は任意のモノしか表さないというのではなく、任意のモノを表すには「物」という要素が用いられてもよいと考える。(i) に示すように、日本語では、「物」という要素はその出現環境により、異なった意味解釈を有する。例 (5) と異なり、(i) では、「物」は過去、現在 (進行中) などの時制環境にある場合、特定の何か、あるいは特定できるものを指示する。

- (i) a. 物がなくなった。
- b. 太郎は何か物を探しているようだ。

本稿は、任意のモノは客観的に存在するモノも抽象的なモノも表すとす。また、「物」という要素は任意のモノを表すのに使えると考え、以下、任意のモノを表す「物」の出現に注目し、考察を行う。

### 3 任意の解釈をもつ空範疇の生起

ここでは、まず、任意の解釈をもつ空範疇の生起に関する先行研究を概観する。次に、目的語位置の任意のモノを表す要素「物」とゼロ要素との交替について考察し、任意のモノを表す目的語がゼロ要素と交替しにくいということを指摘する。その後、その理由について説明を加える。

#### 3.1 先行研究

この節では、任意の解釈をもつ空範疇の生起について日本語を中心に論じている Kuroda (1983)、影山 (1993)、王 (2008) について概観する。

##### 3.1.1 Kuroda (1983)、影山 (1993)

Kuroda (1983) は、ある空範疇は任意の解釈をもつのであれば、 $PRO_{arb}$  であるとしており、日本語では任意の解釈をもつ空範疇の生起に関して英語と同様なことがいえると論じている。つまり、任意の解釈をもつ  $PRO_{arb}$  は主語位置にしか出現できず、目的語位置には出現しえないと論じている。

(6) a. John persuaded Mary<sub>i</sub> [ $PRO_i$  to go to Tokyo].

b. [ $PRO_{arb}$  Smoking ] is harmful.

c. \* $PRO$  kicked Mary.

d. \*John kicked  $PRO$ .

(7) a. [ $PRO_{arb}$  大麻を買うことは] 禁じられている。

b. \*[子供が  $PRO_{arb}$  買うことは] 禁じられている。

(Kuroda1983: 154)<sup>2</sup>

$PRO$  の生起位置は  $PRO$  定理により規定されている。つまり、 $PRO$  は統率<sup>3</sup>されない位置に出現する。(6) に示すように、英語では、 $PRO$  は  $AGR$  (ement) に統率されない不定形節 ((6a) のような不定詞節や (6b) のような動名詞節) の主語位置には出現するが、(6c) のような定形節の主語位置や (6d) のような動詞の目的語位置からは排除される。

日本語に関して見ると、Kuroda (1983) は、(7a) では誰が大麻を買っても禁じられてい

<sup>2</sup> 本稿の引用例文の表記は、便宜上、発表者が原文に修正を加えた箇所がある。

<sup>3</sup> 統率 (Government): 次の条件を満たす時、 $\alpha$  は  $\beta$  を統率する。

(a)  $\alpha$  が  $\beta$  を  $m$  統御し、

(b)  $\beta$  を支配するすべての最大投射範疇が  $\alpha$  を支配している ( $\alpha$  と  $\beta$  が同一の最大投射範疇内にある)。

ることを意味し、その空主語は任意の解釈を有するため、英語の (6b) と同様に  $PRO_{arb}$  であるとしている。一方、(7b) では、動詞「買う」の空目的語は特定の品物を指すことができるが、物一般を指示する読みがとれない。その理由について、Kuroda は、PRO は動詞の目的語などの統率される位置に出現しえないため、(7b) の空目的語は任意の解釈をもつことが不可能で、任意の解釈として捉えられる場合不適格になると論じている。

また、(7a) の文主語「大麻を買うこと」は、時制辞“(r) u”を含む定形節である。定形節の空主語を PRO と見なすのは PRO 定理の違反になるのではないかという疑問がある。これに対して、Kuroda (1983) は、主語を統率するのは AGR であり、Tense ではないという Chomsky (1981) の議論に従い、日本語には AGR がいないため、定形節か非定形節かに関係なく、主語は統率されないとしている。そのため、(7a) の空主語は  $PRO_{arb}$  であると仮定しても PRO 定理の違反とはならないと述べている。一方、PRO 定理により、PRO は目的語位置などの統率される位置に出現しえないため、(7b) のように、 $PRO_{arb}$  が目的語位置に生起すると不適格になる。

影山 (1993) も Kuroda (1983) と同様に、任意の解釈をもつ空範疇は主語位置にしか生起せず、目的語位置に生起しないとしているが、さらに、任意の解釈をもつ空範疇は非能格動詞の主語位置に生起するが、非対格動詞の主語位置には生起しないとも論じている。

- (8) a. [ $PRO_{arb}$  子供を育てるのは]難しい。  
 b. \*[親が  $PRO_{arb}$  育てるのは]難しい。  
 (9) a. [夜中に  $PRO_{arb}$  さわぐことは]禁じられている。  
 b. \*[夜中に  $PRO_{arb}$  現れることが]よくある。

(影山 1993: 57-58)

影山は、(8a) における空主語は親一般を意味することができるが、(8b) における空目的語は子供一般という総称の意味にとることはできないとしている。また、(9a) の非能格動詞「さわぐ」の空主語は人間一般をさすことができるが、(9b) の非対格動詞「現れる」の空主語は人間一般をさすものとして解釈されないとしている。その理由は、非対格動詞の主語はもともと目的語位置に生起し、その位置は動詞によって統率される位置であるため、任意の解釈をもつ PRO は生起しないからであるとされている<sup>4</sup>。

要するに、Kuroda (1983)、影山 (1993) 共に、日本語における任意の解釈をもつ空範疇は  $PRO_{arb}$  であるとし、PRO は統率されてはならないため、任意の解釈をもつ  $PRO_{arb}$  は目的語位置に生起しないのであると述べている。

<sup>4</sup> 従来、任意の解釈は任意の人、人間一般を意味する。ところが、影山 (1993) では、親一般や子供一般なども任意の解釈であるとされている。つまり、任意の解釈が指示する範囲は小さくなり、限定的になっている。本発表は、従来の見方に従い、任意の解釈は任意の人を表すとする。任意の解釈の指示範囲に関しては、影山 (1993) と一致していないが、目的語位置の空範疇は  $PRO_{arb}$  が有するような任意の解釈をもたないという議論にだけ注目する。

### 3.1.2 王 (2008)

王 (2008) は、日本語における任意の人を表す空範疇と代名詞「人」との交替現象について考察し、任意の解釈をもつ主語は顕在的ではなくゼロ形式で出現するが、任意の解釈をもつ目的語はゼロ形式ではなく顕在的に出現する傾向があるという一般化を提案した。

- (10) a. [ $e_{arb}/??$ 人がタバコを吸うのは]よくない。  
 b. [些細な事が人を/ $*e_{arb}$ 悲しませることは]よくある。

(王 2008: 26)

(10a) は、誰がタバコを吸ってもよくないという普遍的な真理を述べており、動詞「吸う」の主語は任意の人である。また、(10a) と同様に、(10b) は一般的な理屈を述べる文であり、動詞「悲しませる」の目的語「人」も特定の誰かを指すのではなく、任意の人を表すと思われる。任意の人を表す要素は、日本語ではゼロ要素のほかに「人」という顕在的な代名詞もある (王 2008: 23)。ところが、(10a) に示すように、任意の解釈をもつ主語はゼロ形式で出現しなければならず、「人」という顕在的な形式で出現すると容認度が下がる。その一方、(10b) に示すように、任意の解釈をもつ目的語は常に顕在的に出現しなければならず、ゼロ形式で出現すると任意の解釈がしにくくなる。

この一般化は、Kuroda (1983)、影山 (1993) で示された、任意の解釈をもつ空範疇は主語位置に生起し、目的語位置には生起しないという考察と一致している。しかし、その理由に関しては、王は、Kuroda、影山と異なった分析をした。

前に述べたように、Kuroda、影山は、ある空範疇が任意の解釈をもつのであれば $PRO_{arb}$ であるとしている。それに対して、王は、任意の解釈をもつ空範疇は必ずしも $PRO$ であるとは限らないと主張した。まず 1 つは、Takezawa (1987) に従い、日本語では、主語は $AGR$ によってではなく時制辞によって統率されるとし、任意の解釈をもつ空主語は $pro_{arb}$ として分析すべきであるとした。また、もう 1 つは、Hasegawa (1984/5) に従い、空目的語はゼロトピックに束縛される変数であるとし、任意の解釈をもつ空範疇は目的語位置にある場合、変数として分析すべきであるとした。さらに、任意の解釈をもつ目的語が常に顕在的に出現し、脱落しにくいのは、空目的語の性質及びトピックになる要素の特徴によると主張した。

このように、王 (2008) は、Kuroda (1983)、影山 (1993) と異なったアプローチを用いているが、任意の解釈をもつ空範疇は主語位置にしか生起せず、目的語位置には生起しないという議論に関しては一致している。

## 3.2 「物」の脱落

王 (2008) は、日本語では、任意の人を表す目的語は脱落しにくく、顕在的に出現する傾向があるという一般化を提案した。本稿では、この一般化は、任意のモノを表す目的語

にまで拡大されうると考える。この節では、文のレベルと複合語構成のレベルという 2 つのレベルから検証してみる。

### 3.2.1 文レベルにおける「物」の脱落

2.2 節においても述べたように、(11) ((5) の再掲) にある目的語の「物」は、いずれも特定のモノではなく、任意のモノを意味する。

- (11) a. バスの中に物を忘れていないかチェックしてください。  
b. 年寄りになると、物を落とすことが多くなる。

(5) の再掲

これらの目的語は具体的なモノを指示せず、意味的には極めて希薄であるにもかかわらず、文法的には必須な要素であり、なくてはならない存在である。これは (12) で証明できる。(12) に示すように、これらの目的語をゼロ形式にすると、任意のモノという解釈がしにくくなり、特定のモノを意味するようになる。つまり、任意のモノを表す目的語「物」は常に顕在的に出現しなければならず、脱落しにくいものである。

- (12) a. \*バスの中に $e_{arb}$ 忘れていないかチェックしてください。  
b. \*年寄りになると、 $e_{arb}$ 落とすことが多くなる。

また、Sugioka (1984) も以下のような現象を指摘している。

- (13) a. He writes to earn a living.  
b. 彼は \*(物を) 書いて暮らしている。

Sugioka (1984: 90)

Sugioka (1984) は、英語では、(13a) に示すように、動詞の目的語が不特定である場合、その目的語は顕在的に出現しなくても、動詞だけで文が成立するが、日本語では、(13b) に示すように、動詞だけでは成立せず、必ず不特定の目的語「物」を出現させなければならないと指摘している。

意味解釈の面から言えば、(13b) では、動詞「書く」の目的語「物」は小説や、脚本、芝居などの書物一般を意味すると思われる。このような意味は本稿が扱っている任意のモノの概念、つまり、「任意の物、物一般」と比べると、指示範囲は限定され、小さくなっているが、不特定の要素、任意の何かを表す要素は目的語位置では脱落しにくいという考察は本稿と相違がない。

### 3.2.2 複合語構成レベルにおける「物」の脱落

Sugioka (1984) は、英語と日本語の複合語構成の相違について論じる際に、以下の点について指摘している。英語における複合語 “writer” は他動詞 “write” から派生し、(14a) では、“write” の目的語は顕在的に出現していない。その目的語を具現化させるには、(14b) のような PP の形式で、あるいは (14c) のような形式で復元される。これに対して、日本語では、他動詞から派生した複合語は、動詞を名詞化するだけでは成り立ちにくく、(15) に示すように、その直接目的語を編入しなければならない。

(14) a. John’s father is a famous writer.

b. writer of the article

c. song writer

(15) 歌書き、小説書き、芝居書き、脚本書き、コマーシャル書き

(Sugioka1984: 88)

英語の “writer” に相当する日本語は「物書き」である。この「物書き」における「物」は具体的な意味をもたず、ただ主題 (Theme) 項の位置を占めるだけであるが、欠かせない成分であると Sugioka (1984) は指摘している。「物書き」のような構造をもつ複合語は、日本語においては数多く存在する。

(16) 物取り、物乞い、物売り、物覚え、物知り (を格目的語)

物怖じ、物慣れ、物飽き (に格目的語)

物要り、物分り、物好き (が格目的語)

(17) 買い物、干し物、書き物、編み物、洗い物、贈り物

(Sugioka1984: 88-89)

### 3.2.3 本節のまとめ

3.2.1 節と 3.2.2 節では、任意のモノを表す目的語が文レベルにおいても複合語構成のレベルにおいても脱落しにくいことを論じた。王 (2008) において考察した、任意の人を表す目的語が脱落しにくいということを勘案すると、人を表す場合でも、物を表す場合でも、任意の解釈をもつ要素は目的語位置では脱落しにくいということが言える。これは、任意の解釈をもつ空範疇は目的語位置には生起しないという Kuroda (1983)、影山 (1993) の議論を支える証拠になると考えられる。

### 3.3 「物」が脱落しにくい理由

3.2 節で述べたように、日本語では任意のモノを表す要素「物」は目的語位置ではゼロ形式化されにくい。このことは王 (2008) で考察した任意の人を表す要素「人」が目的語位

置で脱落しにくい理由、つまり、空目的語の性質及びトピックになる要素の特徴によるのであるという理由をもって説明することができると思う。

Hasegawa (1984/5) は、日本語における空目的語は $\bar{A}$ -位置にあるゼロトピックに束縛される変数であるとしている。<sup>5</sup> (18a) における空目的語は、A-位置にある主語の「太郎」とは同一指示をもつことができず (\*i)、(19a) のように、すでに話題になった人物 ( $\bar{A}$ -位置のトピック) と同一指示をもつ (j)。(18b) も同様である。

- (18) a. 太郎<sub>i</sub>が $e_{*ij}$ 蹴った。  
 b. 太郎<sub>i</sub>が $e_{*ij}$ 世話することが一番ふさわしい。  
 (19) a. [Zero Topic]<sub>j</sub>太郎が $e_j$ 蹴った。  
 b. [Zero Topic]<sub>j</sub>太郎が $e_j$ 世話するのが一番ふさわしい。

Hasegawa (1984/5) の議論に従うと、ある目的語が脱落するにはまずトピックになり、またそのトピックがゼロ形式化されるというプロセスを経ると思われる。ところが、(21) に示すように、任意のモノを表す目的語の「物」はトピックになりにくい。

- (20) a. バスの中に物を忘れていないかチェックしてください。  
 b. 年寄りになると、物を落とすことが多くなる。  
 (21) a. ?\*物<sub>arb</sub>は、バスの中に $e_{arb}$ 忘れていないかチェックしてください。  
 b. \*物<sub>arb</sub>は、年寄りになると、 $e_{arb}$ 落とすことが多くなる。

これは、トピックになる要素の特徴が関与しているからである。Li & Thompson (1976: 461) は、トピックは特定の要素でなければならないと述べ、また、長谷川 (1995: 28) も不定の名詞自身が主題化できないとしている。一方、任意のモノを表す目的語「物」は不特定の物を表すため、トピックになりにくい。そのため、脱落しにくいものであると考えられる。

#### 4 他言語との対照

前節までは、日本語における任意のモノを表す要素「物」が目的語位置ではゼロ形式化されにくい現象を論じた。筆者の考察により、この現象は日本語だけでなく、中国語にも見られることが明らかになった。

日本語における「物」に対応する中国語には“东西 (dong xi)”という要素がある<sup>6</sup>。(22)

<sup>5</sup> 先行研究では、日本語における空目的語の性質に関して、変数分析 (Hasegawa 1984/5) やpro分析 (Nakamura 1991 等) といった異なった提案がなされている。本稿は、王 (2008) の分析と同様に変数分析を用いる。その理由は王 (2008: 28) をご参照。

<sup>6</sup> 任意のモノを意味する「物」に対応する中国語は、“东西”のほかにも、“物 (wu)” などもあると考える。例えば、「買い物」は、“买东西 (物を買う)” という言い方のほかにも、“购物 (物を購買する)” とも言える。前者は口語的な表現であり、後者は書き言葉でよく使われる表現である。本稿は、より口語的に使われている「物」に対応するには“东西”のほうがより相応しいと考え、主に“东西”を扱うことにした。

に示すように、中国語における“東西”は、日本語の「物」と同様に、その出現環境により異なった意味解釈を有する。

- (22) a. **東西** 带来了吗?  
物 持つ 来る ASP Q  
‘例のものは持ってきましたか?’
- b. 张三 正在 找 **東西**。  
Zhangsan している 探す 物  
‘Zhangsan は何か物を探しています。’
- c. 请 检查 有 没有 忘 **東西** 在 车上。  
どうぞ チェックする ある なかった 忘れる 物 に バス 上  
‘どうぞバスの中に物を忘れていないかチェックしてください。’
- d. 孩子 记 **東西** 比较 快。  
子供 覚える 物 比較的 はやい  
‘子供は物を覚えるのが比較的是やい。’

(22a) では、トピックとなっている“東西”は話し手も聞き手も知っているものであり、特定のものである。また、(22b) では、Zhangsan が探しているものは何であるか、話し手は知らないかもしれないが、特定できるものであると考えられる。それに対して、(22c) (22d) はそれぞれ日本語の (5a) (5c) に対応するものであり、その目的語の“東西”は具体的なモノを指示せず、(抽象的な) 任意のモノを意味する。

また、(23) に示すように、中国語では、“東西”という要素は任意のモノを意味する場合、脱落しにくく、顕在的に出現することを要求する。目的語の“東西”が落とされると、(23a) は、「なくなったものはバスの中に忘れていないかチェックしてください」という意味になり、(23b) は、話題の何かに関して、子供がそれを覚えるのがはやいという意味になる。つまり、その目的語は元来の任意の意味解釈でなくなり、特定の意味解釈になる。

- (23) a. \*请 检查 有 没有 忘  $e_{arb}$  在 车上。  
どうぞ チェックする ある なかった 忘れる に バス 上  
‘どうぞバスの中に (物を) 忘れていないかチェックしてください。’
- b. \*孩子 记  $e_{arb}$  比较 快。  
子供 覚える 比較的 はやい  
‘子供は (物を) 覚えるのが比較的是やい。’

さらに、(24) に示すように、複合語構成のレベルにおいても、日本語に見られる現象と同様であり、任意のモノを意味する要素“東西”は不可欠な成分である。

- (24) a. 物取り: 偷 东西 (的) \*偷 的  
           盗む 物 の 盗む の
- b. 物売り: 卖 东西 (的) \*卖 的  
           売る 物 の 売る の

本稿では、中国語における任意のモノを意味する目的語の“东西”が脱落しにくい理由に関しては、日本語と同様の理由により説明できると考える。中国語は日本語と同様に空目的語がゼロトピックに束縛される変数であると言われている (Huang1984: 549-557, 1989: 18) ため、中国語における目的語が日本語と同様に脱落するにはまずトピックになるプロセスを経ると思われる。トピックになる要素は特定のでなければならないという規則は日本語だけでなく、中国語に関しても有効である (Li & Thompson1976: 461, Tsao1978, 1979: 88 等) とされていることから、任意のモノを表す要素“东西”はトピックになりやすく、脱落しにくいものであると考えられる。

## 5 本稿のまとめと今後の課題

本稿はまず、第2節で任意の解釈の指示範囲について先行研究を検討し、本稿の立場を示した。それに、任意のモノとはどのようなものかを整理し、その上で、任意のモノを表す顕在的な要素は日本語では「物」であることを指摘した。次に、第3節では、文レベルと複合語構成のレベルを検証し、任意のモノを表す目的語「物」が脱落しにくいことを指摘し、その理由を明らかにした。また、第4節では、本稿が論じる現象は日本語においてだけでなく、中国語においても見られることを論じた。結論として、王 (2008) における考察、任意の人を表す要素「人」は目的語位置では脱落しにくいということを勘案すると、任意の解釈の指示範囲が人を表す場合でも、物を表す場合でも、任意の解釈をもつ要素は目的語位置では脱落しにくいと言える。これは、任意の解釈をもつ空範疇は目的語位置に生起しないという先行研究の支えになると考えられる。

また、本稿は、任意のモノを表す要素が目的語位置では脱落しにくいという考察の普遍性を証明するために、第3.2.2節で、Sugioka (1984) の考察、つまり、複合語を作る場合、日本語では目的語 (具体的な意味をもたなくても) を動詞に編入しなければならないということを証拠として用いた。しかしながら、複合語を作る場合に、なぜ目的語を編入しなければならないのか、という疑問はまだ残っている。本稿が主張する、文レベルでの「物」の非脱落の理由と同様に説明できるか、それとも別の理由によるのか、今後検証してみたい。

### 参考文献

- 王丹丹 (2008) 「任意の解釈をもつゼロ要素と代名詞の交替」『日本語文法』 8-1: 20-35.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 高見健一・久野暉 (2006) 『日本語機能的構文研究』 大修館書店.
- 中村捷・金子義明・菊池朗 (1989) 『生成文法の基礎--原理とパラミターのアプローチ』 研究社.
- 長谷川信子 (1995) 「省略された代名詞の解釈」『日本語学』 14: 27-34.
- Charles N. Li and Sandra A. Thompson (1976) Subject and topic: A new typology of language. In: Charles. N. Li (ed.), *Subject and Topic*, 457-489. New York: Academic Press.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on government and binding*. Foris: Dordrecht. (『統率・束縛理論』, 安井稔・原口庄輔 (訳), 研究社出版, 1986.)
- Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of language: Its nature, origin and use*. New York: Praeger Publishers.
- Hasegawa, Nobuko (1984/5) On the so-called 'zero pronouns' in Japanese. *The Linguistic Review* 4: 289-341.
- Huang, James (1984) On the distribution and reference of empty pronouns. *Linguistic Inquiry* 15: 531-574.
- Huang, James (1989) Pro-drop in Chinese: a generalized control theory. In: Osvaldo Jaeggli and Kenneth J. Safir (eds.), *The Null Subject Parameter*, 185-214. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Kuroda, Sige-yuki (1983) What can Japanese say about government and binding? *WCCFL* 2: 153-164.
- Moltmann, Friederike (2006) Generic one, arbitrary PRO, and the first person. *Natural Language Semantics* 14: 257-281.
- Nakamura, Masaru (1991) Japanese as a pro language. *The Linguistic Review* 6: 281-296.
- Rizzi, Luigi (1986) Null object in Italian and the theory of pro. *Linguistic Inquiry* 17: 501-557.
- Sugioka, Yoko (1984) *Interaction of derivational morphology and syntax in Japanese and English*. Ph.D. dissertation, University of Chicago.
- Suñer, Margarita (1983) pro<sub>arb</sub>. *Linguistic Inquiry* 14: 188-191.
- Takezawa, Koichi (1987) *A configurational approach to case-marking in Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Washington.
- Tsao, Fengfu (1978) Subject and topic in Chinese. In: R.Cheng, Y.Li & T.-C.Tang (eds.), *Proceedings of Symposium on Chinese Linguistics, 1977 Linguistic Institute of Linguistic Society of America*, 165-196. Taipei: Student Book Co.
- Tsao, Fengfu (1979) *A functional study of topic in Chinese: the first step toward discourse analysis*. Taipei: Student Book Co.
- (王 丹丹 筑波大学大学院生 outantan2004jp@yahoo.co.jp)

# Occurrence of the empty category with arbitrary interpretation

WANG Dandan

This paper examines the alternation between the null element and “mono”, a pronoun which refers to arbitrary things in Japanese. As shown in (i), “mono”, which refers to arbitrary things, is required to appear overtly and hardly drops, when it is in the object position.

- (i) a. Toshiyori ni naru to, mono o otosu koto ga ooku naru.  
b. \*Toshiyori ni naru to,  $e_{arb}$  otosu koto ga ooku naru.

‘One comes to tend to drop things when one ages.’

Following Wang (2008), this paper claims that the fact that “mono” hardly drops in the object position derives from properties of the zero object and topicalized elements. In conjunction with Wang’s (2008) argument that elements referring to arbitrary persons hardly drop in the object position, the argument of this paper provides supporting evidence for the claim of previous studies in which the empty category with arbitrary interpretation does not occur in the object position (e.g., Kuroda1983).